

# 士別サフォーク研究会（北海道士別市） －羊をめぐる官民協働のまちづくり－

一般財団法人国土計画協会専務理事 太田 秀也

## 1. 士別サフォーク研究会の活動

士別サフォーク研究会(以下「研究会」という)は、北海道士別市(人口16,562人(令和6年9月末現在))において羊を核としたまちづくりを進める任意団体である。1982年に発足し、1993年度に地域づくり表彰・国土庁長官賞を受賞している。

士別市は、北海道北部の中央に位置し、札幌市までは、車(北海道縦貫自動車道等経由)で約2時間半、JR(宗谷本線)では約2時間の場所に位置する。1899(明治32)年に最北で最後の屯田兵の入植によって開拓の鉤がおろされた旧「士別市」と、1905年の御料地貸下げによって開拓の歴史が始まった旧「朝日町」が、2005年に合併し、現「士別市」が誕生した。

以下、研究会の活動の概要を、研究会HP、研究会提供資料等の情報をベースに紹介する。

### (1) 活動開始のきっかけ及び活動の経緯

#### －活動継続43年目－

士別市では、1967年にオーストラリアからサフォーク羊(良質の肉用種として名声のある黒い顔の羊)を100頭輸入し、市営めん羊牧場での飼育をスタートさせていたが、「まちづくり市民会議」や士別青年会議所開催フォーラムでのサフォークでまちおこしをするという提案を受け、1982年に、士別青年会議所創立25周年記念事業の企画で、青年会議所会員、市民約200名の参加により「士別サフォーク研究会」が発足した。

PR活動や勉強会を進めるなか、翌1983年には、公民館と共催で開催した「暮らしの紡ぎセミナー」に参加した主婦20名強により婦人サークル「くるるん会」が発足し、羊毛製品の製作・販売・PR活動を行うとともに、「第1回ニットフェア」を開催した。

1984年には、東京の伊勢丹デパートで開催された「大英国展」に出展されていた世界のめん羊12

種、12頭を英国羊毛公社より贈呈を受けた(これが「羊と雲の丘」整備につながった)。

1991年には「サフォークフェスティバル」、2003年には「全国ニット大賞」、2019年には「めえめえかふえ」、2023年には「しばれ焼き体験会」の活動を開始している。

また、1985年には、研究会の会長の音頭、会員・市民有志65名の出資により、羊毛製品づくりと販売を手がける「株式会社サフォーク」(資本金500万円)が設立された。

一方、士別市も、1984年に「開発振興室」を設置し、1992年に第3セクター方式で「羊と雲の丘観光株式会社」(資本金5,000万円)を設立し、「羊と雲の丘」(1992年)や「世界のめん羊館」(1994年、羊の飼育・ふれあい体験施設)、「めん羊工芸館くるるん」(2009年、ニット製品作りなど体験施設)などの施設の整備を進めた。加えて、2005年に官民一体となったプロジェクト団体として「サフォークランド士別プロジェクト」\*を立ち上げ、観光プロモーション活動や生産力の強化、ブランド化の確立など、生産・観光振興の両面から様々な取組を進めている。

\*構成団体(事務局:士別市)

士別観光協会、士別商工会議所、朝日商工会、士別めん羊生産組合、士別サフォーク研究会、北ひびき農業協同組合、羊と雲の丘観光株式会社、めん羊工芸館くるるん、かわにしのお農園、株式会社サフォーク、士別青年会議所、羊まつり実行委員会、士別中心商店街振興組合、朝日商工会青年部、しべつクルール、士別市地域おこし協力隊



(羊と雲の丘観光株式会社HPより抜粋)

## (2) 現在の活動内容

### 一各種委員会設置による多様な活動展開一

研究会では、総会、役員会、理事会等の下に、開発事業室、羊毛事業室、事務局を設け、各種委員会（研究開発事業委員会、推進力開発事業委員会、くるるん会、ウール研究開発委員会、ニット大賞委員会、工芸館運営委員会、総務委員会）を設置して活動を展開している。研究会の会員は、2024年8月現在で107名（法人48名、個人59名）となっている。

2023年度の主な活動は、以下のとおりである。

### ①全国ニット大賞〔ニット大賞委員会〕

羊毛を使った作品の全国規模のコンテスト。隔年で実施。

2023年度は第11回目で、65名から76点の出品（内新規出品数37名42点）があり、20作品が入賞し、2023年9月17日に表彰式・祝賀会を実施した。



ニット大賞の作品「花ふくろう」

### ②めえめえかふえ〔研究開発事業委員会〕

子ども・若者を中心に羊とふれあえる機会を増やすこと等を目的に開催。2023年度は5月3日・4日に開催し、ふれあい羊コーナー（要フリーパス）、くるるん工房アクティビティ、型抜き・わなげ（景品付）、牧草ロールお絵描き、さほっちぬりえ、飲食販売（羊と雲の丘ジンギスカン等）などを実施し、大人540人、子ども218人の来場（フリーパス売上実績。ふれあいコーナーに入場しない人を含めると1000人前後の来場）があった。



（上記2点の写真は研究会資料より抜粋）

### ③しばれ焼き体験会〔研究開発事業委員会〕

使い切れていないサフォークラムのホルモンや廃用となるマトンのジンギスカンを提供することでマトンの有用性を広めること等を目的に開催。

2023年度は2024年1月20日に実施し、-25℃の中でラムホルモンの試食、サホケン特製マトンジンギスカンや羊骨スープの販売等を行い、72人（試食実績）の来場があった。

### ④「めん羊工芸館くるるん」の指定管理〔工芸館運営委員会〕

指定管理者として同施設の運営を行い、体験講習や、ふるさと納税の受託事務等を実施している。

2023年度\*は、コロナの影響も収まり、気軽に安価な体験や、学校、各団体等の人数が多い体験が増えた（ただし総売上は横ばいであった）。

※総入館者6,951人、有料体験550人

### ⑤その他

羊毛ワークショップを実施するとともに、地域のイベントや札幌市の地下歩行区間でのイベントに参加した。また、グアテマラ天然染色研究や草木染め研究も進めた。

## 2. インタビュー、現地調査

2024年8月3日に研究会を訪問し、稲毛元会長（写真の右端の方）、志村前会長（写真の右から4番目の方）をはじめ、「くるるん会」会員の方など研究会のメンバーにインタビューを行うとともに、現地調査を行った。その後、高島事務局長にもメールで連絡させていただき確認等を行った。その内容は以下のとおりである。

なお、士別駅から「羊と雲の丘」まで、市の助成でデマンドタクシーが（運賃2000円程度のところを500円で）運行されている。



（以下3点の写真は筆者撮影）

## (1) インタビュー

### ①研究会の体制

研究会では、各種委員会を設け、活動をされていますが、運営はどのように行われていますか。

各委員会は、会員のボランティアによる活動で運営されています。各自、本業を行いながら、時間をあわせて活動に参加しています。「くるるん会」の活動では家で羊毛編み物をすることも多いです。事務局長も会員の中からボランティアで担当しています。

ただし、「めん羊工芸館くるるん」の指定管理の運営には、職員2名を雇用しています。

会長、委員会委員長などはどのように決められているのですか。

任期2年で交代を原則としています。基本、委員会に長年携わってきた会員の中から選任され、バトンタッチされていく感じです。

任期2年で継続性は確保されますか。

長年携わってきた会員どおしの話し合い、共同作業によって活動が行われているので、地に足のついた継続的活動が行われるとともに、新しい活動にも取り組んでいます。

### ②取組の特徴

取組の特徴と考える点（アピール点など）はどのようなものですか。

「羊を核としたまちづくり」といえます。

羊をまちの顔、まちのブランドとした「サフォークランド士別」のまちづくりを、官民一体で進めています。製品、野菜、マンホールなども、羊のブランドを官民一体となって展開しています。

### ③取組が継続している要因

本年度で活動継続43年となりますが、活動が長く継続している要因としてはどのようなことが考えられますか。

「サフォークランド士別」のまちづくりのなかで、まちの顔、まちのブランドをなくすわけにはいけないという気持ちをもって、会員が士別に愛着をもって取り組んでいます。

また、会員自体がやりがいをもって、楽しみながら活動している点も継続している要因と言えます。

研究会の役員も、若い人も含め交代で引継ぎ、前の役員も顧問等として下支えしていることもうまく機能している点だと思われます。

事業を継続するためには組織自体の存続が必要ですが、組織の財務はどのような状況ですか。

研究会の基本的な収入は会費収入に限られ、先ほど述べたように会員のボランティアで活動を行っています。ただ新しい事業を行うため、市の支援をいただいたり、イベント等での物販活動なども行っています。

### ④取組の効果（地域への効果など）

取組の効果はどのようなものがありますか。

「サフォークランド士別」というまちの顔、ブランド形成につながっています。それによって多くはありませんが、まちに人を呼び込む効果も認められます。

### ⑤取組の中で生じた課題、その解決方法

これまでの活動での課題や、現在の課題はどのようなものがありますか。

新陳代謝が一定程度あるとは言え、会員の高齢化が課題です。また、本業が忙しかったり、ボランティアでの活動の限界という面もあります。そのため、行政の支援も得ながら、魅力的、やりがいのある取組を進めていく必要があると考えています。

また直接は研究会の課題ではないですが、羊の頭数を増やすことが全体的な課題であり、地域おこし協力隊なども含め、飼育の担い手を増やす必要があります。

### ⑥取組の今後の展望（新たな事業展開など）

今後のめざす方向や新たな事業展開の構想があればお教えてください。

市の支援は、継続事業には難しい面もあり、外部発信力のある新しい事業を提案していく必要があります。

「めえめえかふえ」、「しばれ焼き体験会」など新しい取組も行っていますが、今後とも、若い人の発想で、市と協働して、新たな事業に取り組んでいきたいと考えています。

### ⑦地域づくりを行う団体への取組のヒント等となるアドバイス

これまでの取組を踏まえ、地域づくりを行う団体への取組のヒント等となるアドバイスがあればお教えてください。

本取組は、民が活動を立ち上げ、官がバックアップしてきたことで続いてきています。そういう意味で、民が動き、官が支援する官民一体となった取組が重要と考えます。

また、先ほど述べたように、新旧の会員が連携して取り組むことも必要と思います。

我々の活動は、ある意味、自ら好きなことを趣味として行う方々による、ボランティア活動で支えられている面が強いので、本業がある中でボランティア活動をうまく継続できるようにする環境整備も重要と考えています。

## (2) 現地調査



時間の都合もあり限られたものとなったが、「羊と雲の丘」や「世界のめん羊館」を見学させていただいた。見渡す限り緑が広がる広大な丘陵に牧場が広がり、のびやかで落ち着いた施設であった。

士別駅には「ようこそ！サフォークランド士別へ」の看板が設置されており、官民一体、地元一体となった取組が感じられた。



## 3. まとめと若干のコメント

以下、士別サフォーク研究会の取組の特徴・ポイントと思われる点をまとめるとともに、若干のコメントをしたい。

### (1) 取組の特徴・ポイント

本誌2024年1月号50項以下において、「地域づくり表彰の表彰事例の整理・分析」として、これまでの地域づくりの取組事例を整理・分析したが、その内容も踏まえ、研究会の取組をみると、以下のような特徴・ポイントが挙げられる。

#### ①取組の位置づけ

地域に人を呼ぶ「観光振興」、地域資源を活用した「地域特産物の開発・販売」を中心とした

「事業活動」（同誌53頁参照）と位置付けることができる。ただし、企業等の事業的主体ではなく、住民ボランティア中心の任意団体による活動である点に特色がある。

活動のきっかけ・経緯（同誌52頁参照）としては、“なにか新しい取組を行わないといけない”という思いから始まった「新たな企画の発案」のタイプの取組であるが、その際に、「地域の資源の活用」をしている取組である。

#### ②取組の継続性と特色

研究会の財源は会費収入等限られたものであるが、会員のボランティア活動に支えられ継続性を有する取組となっている。

また自治体からの一定の支援を受ける等、まちの顔を形成・維持するための官民協働の取組となっている。

## (2) 若干のコメント

本取組は、地域資源である羊をまちの顔、ブランドとした「羊を核としたまちづくり」を、官民協働で進めている点で注目される。特に、ボランティアの任意団体による取組が、自治体の施設整備、地域一体となった地域づくりプロジェクトに発展している点が参考となる。

また、多様な取組が会員によるボランティア活動で運営されている点でも注目される。自ら好きなことを楽しく、やりがいをもって行う中で、地域の顔、ブランドを形成し、地域に人を呼ぶ「観光振興」の効果を発揮している点でも、行政の財政制約の下で行政による観光振興にも限界がある中で、地域づくりの一つのモデルと評価できるものと思われる。

今後の課題としては、インタビューで言及もあったように、地域自体の人口が減少する中で、活動の担い手の確保、取組の承継が適切に行われるようにすることが重要である。

また、知名度が必ずしも高くなくと思われることから、地域における他の取組（合宿の里づくり等）や、家族連れ、若いカップル等をターゲットとした周辺の集客施設との連携なども考えていくことが有効ではないかと思われる。

※本稿の内容は、筆者の見解であり、筆者の属する組織及び地域づくり表彰主催団体としての意見ではないことを申し添える。